



有限会社 平澤建設
取締役

平澤 里枝

「終わらせるのは簡単。続けてみたい」——その想い一つで、
40年以上続く会社の舵取りを担うことを決めた平澤取締役。
建設業界で積んだキャリアと経験を活かして、時に反面教師にしながら、
会社も従業員も潤う Win-Win の関係を理想に掲げて組織づくりを行う。
労力を費やした恩恵は皆で受け、会社と従業員が互いを思い、高めあう組織。
すべては、『平澤建設』を守り、残していくためだ。

「会社と従業員が互いを思いあい、
高め合う相互関係の中で事業を守りたい」

地域に根差して40年以上、事業をお客様、従業員——人を大切に歩み

守り継ぐ 続けたい

平澤建設

長野県中野市篠井 106-2

URL : <https://www.hiraken-rt.com/>



取締役
平澤
里枝



代表取締役社長
平澤
豊子

interview
special

大沢
樹生 俳優



after the interview

「平澤社長のご主人亡き後、長女の里枝さんが勤務先を辞めて取締役として家業を守るようになられ、取締役の妹さんが事務を担っておられます。母娘で会社を守っておられることに、応援したい気持ちが入り込みました。妹さんも従業員の方々との関わりを楽しんでおられ、社内の雰囲気はとても良いそう。『私は怖がられているかもしれません』と取締役が笑われると、『私は、皆の“お母さん”といったところでしょうか』とおっしゃった社長。バランスの良い関係が窺えました」

大沢 樹生・談

一般土木工事をメインとし、舗装・外構・河川・造成工事などの土木工事から、大規模施設や個人宅の建築工事も手掛ける『平澤建設』。従業員、顧客、地域との対話を重視する理念を掲げ、1983年から事業を続けてきた。2017年に先代・平澤勇氏が他界し、奥様の豊子さんが代表取締役社長に就任。翌年には長女・里枝さんが取締役に就任し、従業員と共に同社を守っている。本日は、俳優の大沢樹生氏が取締役、そして社長にお話を伺った。

——早速ですが、『平澤建設』さんの歩みから伺います。

(豊) 1983年に義父が『平澤建設』を設立し、その後を夫が受け継ぎ、型枠工事を軸に据えて事業を手掛けていました。その夫が、2017年に他界しまして、取り急ぎ、私が代表取締役に就任したんです。ただ、やはり事業の継続は困難だろうと、廃業するつもりで車輻も処分しました。ところが、建設業界でキャリアを積んでいた長女が家業に入り、夫の残した『平澤建設』を続けてくれることになったんです。

——それは、親孝行をなさりましたね。

(里) 私は、大学の経済学部を卒業し、ゼネコンに入社しました。事務職に入ったのですが、現場代理人の方とやり取りをするうちに私も現場に関わりたいという想いが芽生え、勉強して現場監督の仕事に携わるようになったんです。女性が珍しい業界ですが、性別は関係なく自分次第だと思っていましたし、仕事が面白くてどんどん夢中に。若いころは勝ち気なあまり、職人さんとぶつかることもありましたが(笑)、建造物をつくるこの

仕事に大きな魅力を感じ、辞めるという選択肢はありませんでした。立場的にも部長職を任されるまでになり、キャリアを考える母には家業に入ることを反対されましたね。

(豊) 家業に入って苦勞させることには、やはり親として躊躇いがあったんです。それに、女性が組織の上に立つことは大変です。これまでに築いたキャリアがあるのですから、今後さらに活躍して羽ばたいていけるだろうと思っていましたからね。

——親心ですね。それでも、取締役はお父様が築いた会社を守り継ぐ道を選ばれた、と。

(里) はい。40年以上にわたって続く会社ですし、地域の方々との結びつきもありました。「水漏れが起きているんだけど、助けてくれない?」と近隣の方から連絡を受けることもあり、何かあった時に地域の方が頼ってくださるこの会社を守り、この地域に根ざして事業を続けていきたいという気持ちが強かったんです。終わらせるのは簡単だけど、続けてみたい——その想いで、現在は当社の専

務を務める人と2人で一から再開したんです。2人っきりだったので外注さんの協力も仰ぎながら、2~3年で軌道に乗せ、4年目の今は従業員も12名になりました。

(豊) 苦勞させたくないばかりに心配しましたが、今となっては「事業のことは自分に任せて」という頼もしさを感じますし、皆、安心して働いてくれていると思います。

——それは、ご立派です。やはりお勤め時代とは大きく異なると思いますが、いかがですか。

(里) 前職時代、「もっと、こうあってほしい」と会社に対して改善を求めたい点があったのですが、それを今、実践しています。それが正解かどうかはまだ分かりませんが、七転八倒していますが、とにかくやってみようと思います。

——具体的に、どういう組織を目指しておられるのでしょうか。

(里) 会社と従業員が互いに思い合う組織です。従業員がいるから会社があるのですから、利益が出れば従業員に還元して、労力を費やした恩恵は皆で受けたいですね。そうであればこそ従業員はさらに会社のために努力してくれるでしょうし、会社と従業員が互いに思い合う良い相互関係を築くことで事業は成り立つと思うんです。そのために、ピラミッド型の組織体系ではなく、私をはじめ役員に就く者と従業員の上下関係にとらわれないことなく、風通しの良い組織であり

たいです。

——理想的な組織像だと思います。取締役が従業員の皆さんを大切に思われていることも伝わってきます。

(里) これは皆に話していることですが、仕事は自分のためにするものです。会社に言われてするのではなく、自分がどう成長していきたいかを考え、自分のためにスキルを磨き、仕事を通してノウハウを自分のものにしてもらいたいんです。それが結果的に、お客様の信頼と期待に応える仕事を生み、会社の成長に結びつけばいいですね。気持ちの良い挨拶ができ、人に対して誠実な態度を取り、仕事に真面目に取り組めば、必ず結果は付いてきますし、自分の引き出しも増えます。会社としては、従業員の成長

を最大限サポートして、Win-Winの関係を築いて皆で成長していきたい——私自身、この会社に育ててもらっている一人ですから。私も、皆の鑑となるよう努力を続けます。

——今後、『平澤建設』さんとしてどう事業を進めていこうとお考えですか。

(里) 建設業は現在の社会や人々の生活を下支えしてきましたし、時代が変わろうとも常に社会から必要とされる仕事だという自負があります。当社を信用して仕事をお任せくださる方々に対して、誠実に正直に、良い仕事で応えていくことを大切にすれば、事業は継続できると考えています。会社としては、そのために新たな技術を学ぶといった向学心に応え、学ぶ機会を惜しまず提供していき

いですね。

——「企業は人なり」と言うように、従業員の方々の努力と成長は御社の発展に直結すると思います。

(里) また、50・60代の方々が約60%を占めるので、建設業界の10年後を見据えた取り組みも重要です。これまで業界を牽引してこられたベテランの方々が引退された後、地域のインフラをいかにして守っていくかを考えなければいけない時に差し掛かっています。同業者との差別化を図れるような技術を取り入れ、少数体制でも業界の役に立てる道を探っていきます。そうしてこの場所で、『平澤建設』を守っていく——それに尽きます。

(2021年12月取材)



事務を担当する平澤取締役の妹さんをお交えて

column

2015年、建設業界で働く、働きたい女性のための『長野県建設協会 女性部会』が設立された。平澤取締役は、その初代会長。女性の活躍を推進する国の施策に沿って立ち上げられたものの、活動内容はまさるな状態だったという。そうした中で、取締役は建設業界で女性が生き生きと働き、活躍できる環境づくりに力を入れたという。当時の建設業界は今よりもずっと男社会で、女性を受け入れる環境ではなかった。そこで、女性も建設業界で活躍できることを認知してもらえよう、子ども連れの現場見学会を行った。子育てとの両立も後押し。建設業界で働く母親の背中を見て育つ子どもが、建設業に対して将来進む道の一つとして夢や希望を抱いてくれたらという想いもあったという。建設業界に限らず運送業界などでも活躍する地域の女性を取材し、女性部会のホームページで紹介する取り組みも行き、女性の活躍をPRした。4年間にわたって同部会で活動した取締役。自身、建設業界というフィールドで、受け継いだ会社の舵を取り、守っていく。